京大広報

No. 650　2009.11

「京都大学宇治おうばくプラザ」竣工披露式
ー関連記事　本文3024ページー

目次

自由の学風の継承と次世代研究者の育成
施設担当理事・副学長　藤井　信孝……3022
〈大学の動き〉
「京都大学宇治おうばくプラザ」竣工披露式を挙行……3024
名誉教授称号授与式を挙行……3024
理事（副学長）の担当が変更される……3025
副理事が発令される……3025
理事補が発令される……3025
〈部局の動き〉
先端技術グローバルリーダー養成プログラム第一期生の修了式を開催……3026
医学研究科「人間健康科学系専攻」博士後期課程開設記念行事を挙行……3026
故的場敏博法学研究科教授「追悼の集い」……3027
〈日誌〉……3027
〈寸言〉
京大の遺伝子　小宮　一慶……3028
〈随想〉
知恵をめぐる断想　名誉教授　田中　成明……3029
〈洛書〉
業務と学術の融合へ向けて　安藤　昌彦……3030
〈栄誉〉
山中伸弥 iPS 細胞研究センター長がラスカー賞を受賞……3031
岡田暁生人文科学研究所准教授が第19回吉田秀和賞を受賞……3031
〈話題〉
中学生向けゼミ体験講座「ジュニアキャンパス2009」を開催……3032
グローバル COE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」がカリフォルニア大学バークレー校情報スクールとワークショップ開催……3032
松本　紘総長が第 6 回日中学長会議に出席…3033
松本　紘総長が中国・南開大学創立90周年記念式典に出席……3034
宇治キャンパス公開2009を開催……3034
浙江大学において「京都大学の日」を開催……3035
NHKのドラマを撮影……3036
〈お知らせ〉
無料法律相談のお知らせ……3036
「若者の薬物問題について考える講演会」を開催……3036
第 6 回時計台対話集会「木文化創出～森里海連環学がひらく未来社会」……3037
〈隔地施設紹介〉
野生動物研究センター屋久島観察所……3038

京都大学総務部広報課
http://www.kyoto-u.ac.jp/

自由の学風の継承と次世代研究者の育成

施設担当理事・副学長　藤井　信孝

昨年10月１日付で松本総長より研究および国際(研究)担当理事を拝命し，研究企画・戦略，研究支援，研究規範を特命事項として京都大学本部業務を本務として仕事をさせていただくことになり一年が経過いたしました。

着任後まもなくして益川敏英先生，小林　誠先生のノーベル物理学賞受賞の朗報に接して，京都大学の研究面での底力に大変勇気づけられました。一方で湯川・朝永両博士の時代から綿々と続く京都大学の素粒子物理学，基礎物理学のDNAの重要性に改めて畏敬の念を感じました。湯川博士の研究者としてのまた文化人としての強烈な個性が，京都大学のみならず，日本の多くの研究者を勇気づけ分野を超えてまた世紀を超えて，次世代研究者の“研究者として生きる”ロールモデルになったことは論を待ちません。

ノーベル賞だけにこだわる必要はありませんが，本学では人文系，社会系，自然系を問わず実に様々な強烈な個性と指導力をもった先生方が沢山いらっしゃいます。またそのような先生のご薫陶を受けた学生さんからは，やはり優れた研究者が育っています。本学特有の自由の学風の中で，各研究領域において最先端の研究もしくは独創性豊かな研究が展開され，研究室レベルで個性豊かな指導者を中心として，活発な議論が繰り返され地道な研究が展開されています。またそれぞれの研究の実質的な担い手として，博士後期課程の大学院生をはじめ次世代を担う若手研究者が切磋琢磨して相互に刺激し合うことが，本学の高いレベルでの研究の維持・発展につながっています。大学の使命の最も重要なことの一つは人材育成であり，この意味において，ご自身の研究推進に確固たる信念をもった個性豊かな指導者による若手研究者の研究者マインドの醸成は重要です。

京都大学の第一期中期目標期間に係る業務実績評価として，「京都大学は，自由の学風を継承・発展させつつ多元的な課題の解決に挑戦し，地域社会の調和ある共存に貢献することを目的として，総長を中心とするリーダーシップと部局自治を根幹とするボトムアップとの調和を実現し，実効ある改革を進めている。」という高い評価を受けていますが，第二期中期目標・中期計画の策定においてこれを上回る評価を受けるために，“Plan-Do-Check-Action”のPDCAサイクルを明確にした綿密な立案とその実践的具体化が必要です。一方，国の施策に目を向けると，第Ⅲ期科学技術基本計画を基盤として推進されている“科学技術創造立国としての国創りに結実する科学技術創造”の為に，それを担う次世代の若手リーダーの育成が急務となっています。わが国は科学技術立国である前に教育立国であることを忘れてはなりません。第Ⅳ期科学技術基本計画では是非とも人材育成面にも力を入れて，大学の果たす役割を明確にした計画を策定していただきたいと考えています。上記目標を達成する意味でその中核を担う場としての大学の現実に目を向けると，“大学の教育・研究の効率化(?)”にウェイトを置き過ぎているあまり，科学技術創造立国の明るい未来を展望することは困難な状況にあると言っても過言ではありません。切り口を変えると，日本の大学が急速に疲弊しつつある状況が社会的にもしっかり把握されていないのではないかと思われます。政権交代に伴って設置された行政刷新会議に対して，高等教育・研究拠点としての大学の責務の重要性が軽視されないように，大学人としてアピールしていかなければなりません。

国立大学の法人化は，本来事務部で担うべき多く

の業務を研究者に振り分ける結果となり，大学の教員・研究者が学生の教育，若手“人財”の育成，あるいは個々の研究に費やすべきエネルギーと時間の大半を事務作業に使わざるを得ない状況となっています。一方では大学教員の定員削減は年次進行で強力に推進され，講座制の解体の原動力ともなっていますが，「やってみせ，言って聞かせてさせてみせ，褒めてやらねばヒトは動かず」式の“手取り足取り”－寺子屋式の“知と巧みの伝承”も重要なファクターとなっている，理系の大学研究室における後進育成に抑制的ストレスを与えています。昨今の大学教員は，実験台の上で起こる事象に学生とともに一喜一憂しながら議論する時間が極端に減っていると思われます。学生のモチベーションを高めることにも苦慮されていたり，学生間の対話の欠如等により，彼らが巧みに活用するネット社会から副生する種々の問題への対応にも苦慮していると聞いています。任期付き教員制度は，一部の大学教員の流動性とモチベーションを高めるために効果があったかも知れませんが，一方では優秀な研究者の大学離れを加速させ，多くの雑務を担う大学の助教ポストへの就任希望者を減少させる傾向にあります。また10年前から推進されてきた国の施策としてのポスドク増員計画は，キャリアパスを明確にシステム化していなかったことから，研究者としてのモチベーションを維持しようとしても，将来設計等の悩みからそれを維持できないジプシー研究者を大学や公的研究機関に沢山抱え込む現実となり，社会問題化しつつあります。これらの問題を解決するための妙案として，一部のポスドクを研究職と事務職の中間職として雇用を検討することも勘案すべきかもしれません。

京都大学における学術研究の推進に向けた取り組みとして，「伝統を基盤として，革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学」を具体化するためには，京都大学を構成する研究者一人一人が活き活きとして研究に専念できる体制を構築することが肝要ですが，国立大学法人化後の大学運営の仕組みは研究者の業務負担を増やす結果となっており，将来的には研究支援専門職（中間職）の導入も重要な検討課題になってくると思います。一方では若手研究者とりわけ博士後期課程に身を置く優秀な研究者がアカデミアに残って研究を継続するための研究環境の整備と，彼らに研究者としての人生設計の明るい将来像を明確に提示することの重要性を痛切に感じております。これを受けて，京都大学独自の予算を活用して自由度の高い研究環境の中で，優秀な若手研究者を確保し次世代研究者として育成することを目指し，京都大学から継続的に各分野でグローバルリーダーとなる研究者の育成と創出を推進する次世代研究者育成支援事業「白眉プロジェクト」を創設いたしました。運営費交付金の削減や教員定員の削減等日本の大学を取り巻く厳しい環境の中で，優秀な若手研究者を世界から集めて，自由な環境下で少なくとも５年間研究に専念していただくという趣旨で，松本総長の熱い思い入れもあり，本年度からスタートすることになりました。文系からも理系からも心知体に優れた次世代を担える研究者に白眉プロジェクトに結集していただき，本学の基本理念である地球社会の調和ある共存のために，多元的課題の解決に取り組んでいただきたいと思っています。白眉研究者（准教授および助教）は次世代研究者育成センターに所属していただくことになりますが，実際の研究場所の確保は各部局の先生方のご協力なくしては非常に困難です。各部局の研究スペースの確保も非常に逼迫していることも重々承知いたしておりますが，京都大学の，日本のあるいは世界の将来を担う研究者を京都大学として育成することの意義をご理解いただき，是非ともご協力のほどよろしくお願いいたします。

11月１日付で理事の所掌を替わり，施設を担当することになりました。特命事項として教育・研究環境，学生支援施設，福利厚生施設，キャンパス計画を具体的に担当することになりますが，本学のエクセレント・ユニバーシティーとしてのキャンパス構想を実現するために微力ながら粉骨砕身の努力をする所存でございますので，ご意見ご協力ご指導の程よろしくお願いいたします。

大学の動き

「京都大学宇治おうばくプラザ」竣工披露式を挙行

10月23日（金），「京都大学宇治おうばくプラザ」の完成を記念して，竣工披露式が行われた。

同プラザは，本学の中期目標・中期計画に基づき策定した「京都大学重点事業アクションプラン2006～2009」において，学生支援事業として建設が計画されたものである。大学院生・留学生・研究員等が集う研究施設として，また，国際会議や学会等が常時開催できる施設として，並びに地域住民および社会との活発な交流が可能な開放的施設として建設された。

鉄筋コンクリート２階建て，300人収容の「きはだホール」，セミナー室５室および多目的に利用できる「ハイブリッドスペース」があり，また，民間業者が運営するコンビニエンスストアとレストランを併設している（大学施設の利用可能時間は，午前９時～午後８時30分（年末年始を除く），予約制）。

竣工披露は，松本　紘総長，尾池和夫前総長らによるキハダ（黄檗）の記念植樹，久保田勇宇治市長，岡田亘令黄檗宗管長，松本総長，尾池前総長らによるテープカットで始まり，竣工披露式には約220名の出席があった。松本総長から「教育・研究の拠点，また，地域との交流拠点として発展することを期待したい」との挨拶があり，宇治市長，黄檗宗管長から祝辞が述べられた。この後，尾池前総長による竣工記念講演会が行われ，引き続き併設のレストランで行われた竣工祝賀会では，なごやかな雰囲気のなか，新たなスタートを切った「京都大学宇治おうばくプラザ」の発展を盛大に祈念した。

キハダ（黄檗）の記念植樹

竣工披露式の様子

（宇治地区事務部）

名誉教授称号授与式を挙行

10月29日（木），午後３時から総長応接室において大西珠枝理事・副学長，堀　智孝大学院人間・環境学研究科長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され，松本　紘総長から鈴木雅之元教授（大学院人間・環境学研究科）に京都大学名誉教授の称号が授与された。

名誉教授の称号を授与される鈴木元教授

（総務部）

理事(副学長)の担当が変更される

11月１日付けで理事(副学長)の担当が変更された。

江﨑　信芳　理事(副学長)　企画・評価担当(変更なし)
大西　珠枝　理事(副学長)　財務・広報担当(旧担当：総務・人事・広報)
大西　有三　理事(副学長)　外部戦略・情報・安全管理担当(旧担当：施設・情報)
塩田　浩平　理事(副学長)　総務・人事・産官学連携担当(旧担当：財務・産官学連携)
西村　周三　理事(副学長)　教育・学生担当(旧担当：教育・学生・国際(教育))
藤井　信孝　理事(副学長)　施設担当(旧担当：研究・国際(研究))
吉川　　潔　理事(副学長)　研究・国際担当(旧担当：外部戦略)

副理事が発令される

遠藤　隆農学研究科長および小寺秀俊工学研究科教授が副理事に11月１日付けで指名された。任期は平成22年９月30日まで。

◆副理事(けいはんな学研都市担当)

遠藤　　隆

◆副理事(総長室長)

小寺　秀俊

理事補が発令される

徳賀芳弘経営管理研究部教授(藤井秀樹理事補の後任)，阿辻哲次人間・環境学研究科教授および石原和弘防災研究所教授が理事補に11月１日付けで指名された。任期は平成22年９月30日まで。

部局の動き

先端技術グローバルリーダー養成プログラム第一期生の修了式を開催

9月25日，京大会館にて，先端技術グローバルリーダー(GL)養成プログラム第一期生の修了式が開催された。

同プログラムは，博士学位取得直後の研究者および博士学位取得のための研究がほぼ終了している博士後期課程大学院生を対象とし，深い専門性に加えて幅広い識見を備え，国際的にリーダーとして活躍する人材を養成するためのもので，工学研究科と薬学研究科が連携し，科学技術振興機構の支援を得て，平成20年度から実施されている。養成対象者は半期ごとに募集され，養成期間は1年間である。第一期生は，平成20年10月から同プログラムが提供する産官学交流塾，双方向教育型共同研究，実践英語教育の各プログラムに取り組み，この度，晴れて修了を迎えることになった。

修了式は，産官学交流塾および双方向教育型共同研究に協力いただいている連携企業・機関の方々にも列席いただき，和やかに執り行われた。

森澤眞輔GL養成ユニット長より第一期生に修了証書が授与された後，藤井信孝研究担当理事・副学長から祝辞があった。第一期生代表者挨拶では，「同プログラムの履修によりプレゼンテーション力が向上した」，「産官学交流塾や双方向教育型共同研究では，異分野の研究や研究者との交流を持つことができ，視野が広がった」などの感想とともに，「今後，社会へ出るにあたって，同プログラムでの経験を大いに発揮したい」との抱負が語られた。

森澤GL養成ユニット長による修了書授与

（先端技術グローバルリーダー養成ユニット）

医学研究科「人間健康科学系専攻」博士後期課程開設記念行事を挙行

医学研究科では，本年4月に開設された人間健康科学系専攻博士後期課程の開設記念行事を9月30日に実施した。同専攻は，平成19年4月に医学部保健学科(同20年4月人間健康科学科と改称)を母体として設置された。このたび開設された同専攻博士後期課程は，健康科学をさらに発展させ人の真の健康を創成するため，全人的視野に立って医療・保健・福祉を深く考察した「人間健康科学」の理論を構築し，高度先進医療に対応できる専門職の育成と教育者を志す人材の養成を目指している。

松本総長による記念講演

記念行事は，百周年時計台記念館において，記念講演会，記念式典並びに記念祝賀会が行われた。記念講演会は，松本　紘総長の「無線送電と宇宙太陽発電所」と題した講演の後，フルート，バイオリン，ヴィオラ，チェロによる祝賀演奏を挟み，岩田　誠東京女子医科大学名誉教授の「キュアとケア－医療人には何が出来るのか－」と題しての講演があり，約250名の参加があった。

祝賀演奏

また，岡本元総長，井村元総長ら関係者約150名が出席した記念式典では，来賓からの祝辞があり，同専攻博士後期課程への大きな期待が述べられた。引き続き行われた記念祝賀会では，和やかな雰囲気のなか同課程の門出を祝った。

記念式典で式辞を述べる光山医学研究科長

（大学院医学研究科）

故的場敏博法学研究科教授「追悼の集い」

10月８日(木)，本年７月21日に逝去された的場敏博教授の追悼の集いが法学研究科大会議室において執り行われ，約150人の参列者があった。

追悼の集いは，中西　寛教授の開会の辞にはじまり，参列者全員の黙祷の後，ご生前の的場教授の講義テープが会場に流れ，林　信夫研究科長から弔辞が述べられた。続いて，村松岐夫名誉教授・学習院大学教授，初宿正典教授，小野紀明教授，小野耕二名古屋大学教授，辻　陽近畿大学准教授および博士後期課程の辻　由希さんからお別れの詞があり，ショパンのピアノ協奏曲１番の演奏が流れる中，最後に献花を行い，在りし日の的場教授を偲んだ。

弔辞を述べる林研究科長

（大学院法学研究科）

日誌　2009.9.1 ～ 9.30

９月４日　志賀高原ヒュッテ移管式
〃　東京オフィス内覧会
７日　役員会
８日　部局長会議
９日　国際交流委員会
〃　財務委員会
11日　学生部委員会
〃　東京オフィス開所式
14日　役員会
15日　企画委員会
〃　教育研究評議会
18日　図書館協議会
24日　博士学位授与式
〃　全学教育シンポジウム(～25日まで)
25日　第10回記者クラブとの定例懇談会
26日　ジュニアキャンパス2009(～27日まで)
28日　役員会
29日　広報委員会

寸言

京大の遺伝子

小宮　一慶

自分でも，つくづく京都大学卒業生だ，と思うことがある。京大の遺伝子というものがあるのかどうかは知らないが，とにかく，人に束縛されるのがいやで，自由にいたいという気持ちが強い。また，他の人と同じことをしているのも嫌だし，人に私がやることを決められるのも好きではない。自由でユニークで，かつ独立していたいという気持ちが人一倍強いと思う。周りにいる人には結構迷惑かもしれないが，これは間違いなく，京大時代に培われたものだと自分では思っている。こんな自分になってしまったのは，京大のせい(おかげ)だ。もちろん，私はそんな京大が大好きだ。

他大学の卒業生と話していてよく驚かれることが，専門の授業では春の学期始めに授業の登録をしないということだ。私は法学部の出身で，現在はどうなっているのかは分からないが，私たちの頃は二回生から通年の専門の授業があり，私が記憶している限り，ゼミと外書講読以外の授業では登録が必要なく，学年末の試験の直前に試験の登録をするだけで，試験で合格点を取りさえすれば単位を与えられるというシステムだった。登録がないからもちろん出欠をとることもしない(その当時よく言われたのは，法学部の教授には司法試験の委員をされている先生も多くいらっしゃったので，法経４番教室など大教室の前方席には，勉強熱心な他大学の学生が京大生よりも多く入っているということだった)。

教養部の頃は，授業を登録し，多くの授業で出欠をとっていたから，二回生になって教養の授業に出ながらも専門の授業を受けるようになると，自由であるとともにすごく「大人」扱いされているということを感じたものだ。

なぜ，こういうシステムになっていたのかは知らないが，大人扱いということは，自己責任を求められるということでもあった。勉強したければ好きなだけ勉強することができる一方，やらないということに決めるか，あるいは，勉強しなければと思っても自分を律することができないと，単位を取ることも覚束ない。実際，私のクラスでは，最難関の試験に合格した者もいる一方，卒業しなかった者もいた。

学校自体がこのように全く自由だったから，仲の良い友達とは，旅行に行ったり，とことん飲んで話し合ったり，京都という学生に寛容な土地柄もあり，とにかく，自由を満喫したというのが私の学生時代の記憶だ。とことん友達とも付き合ったから，いまだに同級生とは仲がよい。

私たちの頃はまだ学園紛争の余韻があり，ストライキや機動隊の学内での放水などもあって，授業環境も十分でなかったときもあったから，余計に自分で勉強するとか，仲間と連絡を取り合ってイベントを行うなどの自立が求められたと思う。自分で計画して，自分でやるということだ。

卒業して，東京銀行に就職したが，最初は，勤務地や住む所，仕事内容や勤務時間が決められていることをすごく楽に思った。それまでの学生時代は，とにかく自分で決めて，自分でやるのが当たり前だったから，何でも決めてくれるのはなんと楽なことかと思った。

しかし，京大時代に身に付いた「自由」と「自立」がそのうちにむくむくと心の中に湧き起こったのか，その，すべて決めてくれることに辛抱できなくなったのだと思うが，10年少し銀行に勤めた後，結局，小さな会社に転職し，その後，13年前に独立した。

現在では，私をいれても９人の小さな経営コンサルティング会社を経営している。本などの執筆，テレビのコメンテーター(毎日放送「ちちんぷいぷい」，テレビ朝日「やじうまプラス」他)，講演など自分の考えを披露する機会を多く与えていただいているが，言いたいことを言うということも京大時代に身に付いたことだと思う。その際も，自分の独自性に結構こだわっている。本業の経営コンサルタントとしての企業へのアドバイスの際も「他社との違い」ということを強調するのも，京大の遺伝子かもしれない。

(こみや　かずよし　株式会社小宮コンサルタンツ代表取締役　昭和56年３月法学部卒)

随想

知恵をめぐる断想

名誉教授　田中　成明

知恵とはどのようなものなのか，また，どのようにして身につけるのか。知恵(wisdom, Weisheit)は，実践知(phronesis, prudentia)とほぼ同一あるいは密接不可分のものと一般に理解されており，私がこのような問いに関心をもっているのも，自分自身の生き方の反省ということもあるが，主として実践知の一典型でリーガル・マインドと呼ばれている法的な思考・判断力・感覚の研究や教育との関連からである。

知恵について考えるとき，いつも気になっているのはカントの見解である。カントは，『人間学』では，知恵(Weisheit)を「理性を実践的に，法則に適って完全に使用する境地を指す理念」であるとし，そこに導く格率として「(一)自分で考えること，(二)(他者と交流する場合)他者の立場に身を置いて考えること，(三)つねに自分自身に矛盾するところがないように考えること」を挙げている。興味深いのは，ほぼ同じような格率を，『判断力批判』のなかで，一般に常識と同義と解されている「普通の人間悟性」の格率としても挙げており，このような共通感覚(sensus communis)と呼ばれている常識を，総体的な人間理性と自分の判断とを照らし合わせて錯覚から免れさせる判定能力の理念と理解して，正義感覚などを共通感覚の例として言及していることである。しかし，知恵，常識，共通感覚，そして実践知の異同・関連は，カント自身の説明に一貫していないところもあり，研究者の解釈も分かれていて，なかなか理解しにくい。

このあたりのカントの見解については，近時，政治的判断力の考察において見直され斬新な解釈も提示されており，リーガル・マインドにおける常識・社会通念の重要だが微妙な役割を考える上でも，貴重な示唆をあたえてくれそうである。

もう一つ気になっているのは，山崎正和「『教養の危機』を超えて－知の市場化にどう対処するか」(同『歴史の真実と政治の正義』)において，知の形態をその働きの方向によって分類し，情報(information)と知恵(wisdom)を両極として，知識(knowledge)をその中間に位置づけて，情報化の脅威を論じている見解である。山崎は，知恵を「時間を超えた真実を総合的にとらえるもの」，「深い意味で実用性を持つが，およそ新しさや多様性とは縁がなく，それ自体が内部から自己革新を起こす性質にも欠けている」ととらえる。そして，知識は，断片的な情報に脈絡を与え，広い知の統一性を求め，永く持続するものにしようとする点では，知恵の方向をめざしながら，その内部に多様な情報を組み込み，全体として分節性のある構造をつくりあげ，順序配列のある統一をつくり，たえず新しい情報を受け入れて自己刷新に努め，古い知識との連続性を維持しようとする。知識のこのような性質の故に，情報や知恵よりもそれを理解するのに努力を必要とし，実用性という点からみても，この二つに比べて効用が分かりにくく，市場化しにくい。そのため，知識よりも情報が優位を占め，人間の知のあり方が変化しつつある傾向を憂慮している。

山崎のこのような指摘に照らしてみると，法科大学院におけるリーガル・マインド教育が，実務的ノウハウとの関連はともかく，試験対策との関連という，いずれにしろ実用性に関心が偏り，法的知識も主として実用的な情報として教えられ学ばれるきらいがある背景がよく分かる。だが，プロフェッションとしての法曹の本領が，高度の学識を正義の実現のために活用する知恵を修得していることにあり，専門職大学院としての法科大学院の役割もそのような学識と知恵の教育・訓練だとすれば，法的知識の短絡的な実用的情報化傾向は，法曹養成と大学の使命，いずれの観点からも問題ではなかろうか。

(たなか　しげあき　平成17年退職　元法学研究科教授，専門は法哲学)

洛書

業務と学術の融合へ向けて

安藤　昌彦

ここに書くのは業務と学術の融合を目指す壮大な物語ではなく，京都大学という最高学府にあってセンター業務と学術の融合に悩む一教員のモノローグである。市中病院でがん臨床研究を手掛ける立場から縁あって本学へ奉職した時点で，自分の「業務」と「学術」は，タイトルとは裏腹に見事に泣き別れ状態となった。法人化によって労働安全衛生法の適用を直接受けるようになった大学において，保健管理センター教員の守備範囲は拡大の一途であり，従来からの定期健診・健康相談・ホームページ管理等に加え，産業医としての職場巡視・衛生委員会出席・過重労働面接指導，大学の安衛法対応推進（雇い入れ時健診，特殊健診の立ち上げ）など枚挙に暇がない。その中で昨年度に行った事業の一つが，メタボリックシンドローム進展予防のための保健指導プロジェクトである。我々は特定保健指導とは直接関係なかったが，健診などで「減量しましょうね。」と話すたびに感じていた，独自の減量プログラムを持たない空虚感と正面から向き合う貴重な機会の到来であった。

・・・とはいえ，保健管理センターのスタッフには肝心の管理栄養士がいない。しかしそこは大学の強み，センター教員が協力分野として参加する大学院医学研究科社会健康医学系専攻予防医療学に在籍する管理栄養士であるＩさんの貴重なご協力を得て，およそ180名の本学構成員の方々に３か月間の継続的保健指導を実施することができた。さすがは専門職，初回対面サポートで参加者をすっかりその気にさせるＩさんの力量には脱帽した。試行とはいえ，こうしたサービスを初めて提供したことは重要な第一歩であり，同じく社会健康医学系専攻予防医療学に在籍するＹさんの力量に頼りきりで実施中の桂分室肩こりケアとともに，保健管理センターの新たな事業展開における道標と考えている。

保健指導プロジェクトの学術的側面は，継続的保健指導において，従来の標準的方法である電子メールによる個別支援に対し，参加者が個人情報を伏せた形でお互いの状況を見せ合いながら，管理栄養士からの全体指導・個別指導を一緒に受けることのできるウェブ集団減量支援システムの方が，より大きな減量効果をもたらし得るか検証する無作為化比較試験である。従来の方法では不可能であったグループダイナミクス効果の長期持続的活用を実現した本システムは自力で開発したもので，日々の業務を通じて培ったデータベースソフトを操るスキル（診療当番表や過重労働セルフチェック，桂分室エクササイズ・ヒーリング予約システムのウェブ公開など）が大いに役立った次第である。試験の結果，ウェブ集団減量支援システムにおいてより大きな減量効果を認め，獅子奮迅の活躍であったＩさんはその年度の課題研究優秀賞を受賞し，開発したシステムは大学保健管理業務の中で生まれた知的財産として，産官学連携センターのご協力を得て京都大学から特許出願中である。まだ道半ばであるが，時宜を得た巡り合わせの妙を深く感じたプロジェクトであった。

こんな風にはうまく噛み合わないのが，日常の自分の姿であることは言うまでもない。日々の業務とのつながりを失ったがん臨床研究は，多施設共同臨床試験における QOL 調査研究事務局という立場で綿々と継続し，いつの間にかライフワークの観がある。全国規模のオンコロジーグループや国立病院機構ネットワーク等の中で，データマネジメント・統計解析・果ては電子データセンター運営に至るまで，勤務医時代よりもむしろ深く臨床研究に関与しているのは皮肉なものである。業務を通じて医師としてのアイデンティティーを確認しつつ，自由な時間を利用して学術に関わるスタイルは自分には結構合っているかもしれない。しかし行き着く先が「余人をもって代え難いカオナシ」でよしとするわけでは決してない。というわけで，業務と学術の融合へ向けて自分の悩みは続く。

（あんどう　まさひこ　保健管理センター准教授，専門は臨床疫学，予防医療学）

栄誉

山中伸弥 iPS 細胞研究センター長がラスカー賞を受賞

このたび，山中伸弥 iPS 細胞研究センター長が2009年のラスカー賞を受賞された。授賞式は10月２日，ニューヨークピエールホテルにて行われ，iPS 細胞研究センター長の山中伸弥教授が2009年の基礎医学研究賞を受賞された。また，本学から総長の代理として塩田浩平理事・副学長が出席された。過去の受賞者も含め約300人の出席のもと，山中教授に彫像と賞金が贈られた。受賞スピーチで山中教授は，「整形外科医としては成功しなかったが，基礎研究の分野で貢献できてうれしい。iPS 研究の成果を早くヒトに応用できるよう頑張りたい」と述べられた。

受賞の彫像を持つ山中教授

ラスカー賞は，米国で最も権威のある医学分野の賞で，基礎医学と臨床医学のそれぞれの分野において卓越した業績を挙げた研究者に授与される。

山中教授の受賞スピーチ

（iPS 細胞研究センター）

岡田暁生人文科学研究所准教授が第19回吉田秀和賞を受賞

このたび，岡田暁生人文科学研究所准教授が第19回吉田秀和賞を受賞された。贈呈式は，10月10日に水戸市の水戸芸術館で執り行われた。

岡田暁生准教授は，昭和57年３月大阪大学文学部を卒業，同63年７月同大学院文学研究科博士後期課程を退学，アルベルト・ルードヴィッヒ大学フライブルグ博士課程音楽学専攻留学等を経て，平成４年４月大阪大学文学部助手に採用，同６年５月神戸大学発達科学部助教授に昇任，同15年４月京都大学人文科学研究所助教授，同19年４月から同准教授となり，現在に至っている。

今回の『音楽の聴き方（中公新書）』による受賞は，音楽の聴取の根本問題についての美学的社会学的な研究によるものである。音楽は言語と同じように文法を持ち，イディオムを持つ。いわば音楽の統辞論ならびに意味論を学習することなくしては，音楽を言語として理解することは出来ない。しかしながら近代の音楽制度は，音楽を言語としてではなくサウンドとして享受させることで，音楽を産業化してきた。カントやハンスリックから三島由紀夫，小林秀雄，村上春樹に至る多彩な文献を駆使しつつ，岡田准教授は近代における「音楽の聴き方」の変容を明らかにし，音楽が言語からサウンドへと退化していく危機に警告を発している。

吉田秀和賞の受賞は，歴史的な目配りならびに現代の音楽状況の鋭い分析に対して授与されたものである。

第19回吉田秀和賞受賞祝賀会にて

（人文科学研究所）

話題

中学生向けゼミ体験講座「ジュニアキャンパス2009」を開催

9月26日(土)・27日(日)の2日間にわたり，中学生に学問の最先端に触れてもらうことを目的として「ジュニアキャンパス2009」を京都市教育委員会との共催により開催した。

今年で5回目を迎えるジュニアキャンパスは年々参加希望者が増加し，今年は過去最高となり，中学生約300名・保護者等約100名の参加があった。

初日の午前中は，開講式およびオリエンテーションを実施の後，「宇宙へ飛び立とう－観る，翔る，使う－」と題する松本　紘総長の中学生向け特別講義を実施。宇宙についての話だけでなく，子ども時代のエピソードや研究生活などの話を交えながら，未来を担う中学生にメッセージを込めた講演が行われた。特別講義終了後，総長の発案で質問タイムが別室で設けられ，十数名の中学生，保護者が総長を囲んで親しく談笑したり，記念写真を撮ったりする一幕もあった。

1日目の午後と2日目は，各研究施設，講義室において実験，工作，自然観察，天体観測などの体験型のゼミや，テキストをもとに議論するゼミなど，25講座のゼミを開講，2日目の午後には並行して，「キャンパスミニツアー」も実施し，こちらに参加される方もあった。

また，昨年に引き続き「大学院生等によるポスターセッション」も実施し，普段，大学でどのような研究を行っているかを中学生に分かりやすく説明するコーナーや，素朴な疑問に学部生が答える「大学何でも相談コーナー」を設け，京大生との交流を持つ時間もあった。

ゼミ「マグマ科学ー火山噴火の秘密を探る」

大学院生等によるポスターセッション

（教育推進部）

グローバル COE プログラム「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」がカリフォルニア大学バークレー校情報スクールとワークショップ開催

10月15日・16日，グローバル COE（情報学研究科・学術情報メディアセンター「知識循環社会のための情報学教育研究拠点」（拠点リーダー：田中克己教授））では，カリフォルニア大学バークレー校情報スクール（University of California, Berkeley, School of Information，学部長：アナリー・サクセニアン教授）と共同研究および学生交流を目的としたワークショップを開催した。

PhD Roundtable における発表後の議論の様子

ワークショップの初日は，共同研究構築に向けた双方からの研究発表が行われた。カリフォルニア大学バークレー校情報スクールからは4件，本学からは5件の研究内容・提案が発表され，情報の信頼性評価や情報リテラシー促進など，情報学を中心とした様々な技術の連携に基づくコラボレーションについて深い議論が行われた。

2日目は，カリフォルニア大学バークレー校が誇る CITRIS（Center for Information Technology Research in the Interest of Society）や Berkeley Center for

New Media などを訪問の後，PhD Roundtable として本学グローバル COE プログラムで選抜された博士後期課程学生４名と，カリフォルニア大学バークレー校情報スクールから選抜された博士後期課程学生４名による現在の研究内容および研究提案の発表が行われ，活発な議論が展開された。

また,Research Collaboration Discussion では，双方からの発表をベースとして共同研究の可能性について議論を行った。

今回のワークショップのような取り組みにより，情報学を中心とした複合学際領域での学術交流が活発化され，学生交流も積極的に行われるようになると期待される。

Lunch with Faculty and PhD students 後の記念写真

（大学院情報学研究科・学術情報メディアセンター）

松本　紘総長が第６回日中学長会議に出席

松本　紘総長は，10月15日，16日の２日間,中国･天津市の南開大学で開催された第６回日中学長会議に西村周三理事・副学長とともに出席し，韓　立友特定助教(国際交流センター)，里見朋香総長室副室長および塚本政雄国際部長が随行した。

本会議は，文部科学省および中国教育部が関わりながら相互に隔年開催され，今回は中国教育部主催で南開大学が担当して開催された。両国の17大学・関係機関から文部科学省審議官，学長等約100名が参加した。

会議は，東京大学総長および北京大学長の共同議長により進行し，第一セッション(開会式)に引き続き，第二セッション(国家の創造計画と大学の発展－211プログラムと985プログラムおよび21世紀COEとグローバル COE を中心として)，第三セッション(創造的人材育成の国際化における思考と実践－日中が共同で創造的人材を育成することについての可能性)および第四セッション(第三セッションのテーマについての意見交換)並びに第五セッション(日中学長会議の運営協議)において，両国の高等教育計画と具体的な実践プログラムに関する大学の役割と責務について熱心な討議が行われた。

松本総長は，第三セッションにおいて復旦大学の楊　玉良学長と共同司会を行い，また，第四セッションにおいて，本学が目指す考え方についての発表および意見交換を行った。

最後に，本会議の運営協議において，２年後の次回会議を，本学と立命館大学が担当して開催することが提案･了承された。これを受けて，松本総長から，日中学長会議が日中間の永い歴史・文化・学術の深い関わりのある京都において開催される意義を説明しながら受諾の挨拶を行い，立命館大学の川口清史総長から開催担当の受諾についての挨拶があり，盛会裡に終了した。

なお，今回の会議において，中国の各大学から本学との交流拡大・展開の要望があり，松本総長および西村理事・副学長は，熱心に懇談を行った。

松本総長による議事進行

会議の様子

（国際部）

松本　紘総長が中国・南開大学創立90周年記念式典に出席

松本　紘総長は，10月17日，中国・天津市の南開大学で開催された南開大学創立90周年記念式典に招待され，西村周三理事・副学長とともに出席し，韓　立友特定助教(国際交流センター)，里見朋香総長室副室長および塚本政雄国際部長が随行した。

南開大学創立90周年記念式典は，同大学体育館において，党・政府機関，主要大学の幹部，卒業生，学生等を集めて挙行された。

同式典において，松本総長は，式典会場の檀上最前列に席を準備され，外国からの賓客・招待者を代表して祝辞を述べられた。

松本総長は，祝辞の中で，南開大学創設の歴史的経緯としての校地の流転とともに，同大学のメインビルディングに象徴的に銅像として設置されている周　恩来元首相の日中交流への功績と本学および京都市との関わりについて触れられた。特に，「雨中嵐山」の同首相の記念碑の詩を全文朗読し，同大学の先達および根源的なものへの敬愛を中国の故事を引きながら演説された。学生，卒業生等各界の参加者および同大学の各位に大きな感銘を与え，参加者一般から最も大きな拍手を得ることができた。

祝辞を述べる松本総長

(国際部)

宇治キャンパス公開2009を開催

今年で13回目となる「京都大学宇治キャンパス公開2009」が10月24日(土)，25日(日)に開催された。天候にも恵まれ，宇治キャンパス会場および宇治川オープンラボラトリー会場合わせて２日間で，約２千名の参加者があった。

今年のキャンパス公開の統一テーマは，「新たな宇治キャンパスへのいざない－最先端科学をより身近に－」であった。宇治キャンパスに新しく完成した市民との交流の場である「京都大学宇治おうばくプラザ」を初公開するとともに，宇治キャンパスでどんな研究活動を行っているかを広く知ってもらい，科学の魅力について考えてもらうことを目的として開催した。

24日午前に行われた公開講演会は，おうばくプラザのきはだホールで，「宇治キャンパスの研究と教育－地域と世界との連携」(宇治おうばくプラザ実行委員会委員長・防災研究所石原和弘教授)，「合成化学：未来を作る科学と技術」(化学研究所山子　茂教授)，「複雑な環境に適応する脳とコンピュータ」(情報学研究科石井　信教授)と題して行われた。24日午後には生存圏研究所，25日午前には化学研究所の公開講演会をそれぞれ行った。

おうばくプラザでの総合展示の様子

２日間を通して行われた総合展示では，各研究所・研究科・センターの紹介が行われ，特別展示では，これまでの宇治キャンパスの歴史やおうばくプラザが完成するまでを写真で紹介した。公開ラボでは，各研究所・研究科・センターの大型実験施設や実験室を公開し，体験学習を実施，楽しみながら先端科学の研究に触れてもらった。また，一般市民からの防災に関する疑問に答える防災よろず相談コーナーや企業の方を対象とした先端研究施設産業利用相談コーナーを設置し，宇治キャンパス内の樹木を散策しながら観察する樹木観察会も行った。

（宇治地区事務部）

浙江大学において「京都大学の日」を開催

10月30日（金），31日（土）の二日間，中国杭州にある浙江大学において，「京都大学の日」が開催された。

浙江大学キャンパス前にて集合写真

この「京都大学の日」は，本学の紹介と浙江大学との学術交流および留学説明会を目的としており，今回が初となる試みである。本学からは経営管理大学院，医学研究科，工学研究科，農学研究科，情報学研究科および地球環境学堂の６部局が参加した。

初日は浙江大学の楊学長の挨拶に始まり，西村周三理事・副学長，森　純一国際交流推進機構長および韓　立友プログラムオフィサーにより本学の概要説明が行われた。西村理事･副学長の挨拶の中で杭州をうたった漢詩が中国語により披露されると，会場内は大きな拍手に包まれた。

西村理事・副学長による挨拶

午後からは参加した６部局が会場となる各キャンパスに分かれ，個別に研究科紹介，学術研究およびモデル授業等を行った。その後，浙江大学褚副学長と鄭副学長主催による懇談会が開かれ，本学と浙江大学間における学生交流の促進，グローバル30等について活発に意見交換が行われた。

２日目は韓プログラムオフィサーによる本学の全体説明に始まり，初日に引き続き個別に部局説明，進学相談等が行われた。

両日ともに参加学生からは，国費留学や奨学金の応募方法等，日本留学に関する熱心な質問や具体的な相談が閉会時刻まで寄せられ，会場は若い熱気に包まれた。

最終日の夜は，中国の本学 OB 主催による同窓会「京都大学中国校友会」の成立大会が開催された。約100名の出席者はなごやかな雰囲気の中で，本学での思い出や近況報告および現在の本学への思いなどが語られるとともに，今後，本学との交流を深めていくことで，本学国際交流行事等へより一層の協力をいただくこととなった。

同窓会「京都大学中国校友会」成立大会の様子

（国際部）

NHKのドラマを撮影

10月25日，NHKドラマ「顔」のドラマ撮影が工学部建築学教室本館において行われた。松本清張氏生誕100年である今年，松本清張氏の作品が次々とドラマ化されている。NHKからの依頼で，清張氏の原点ともいえる傑作短編「顔」というドラマ撮影に協力した。

当日，朝早くから撮影スタッフが集まり，建築学教室本館は「黒崎警察署」に早変わりした。昭和31年という設定であるため，当時の髪型や服装のエキストラによる撮影が行われ，あたりは昭和にタイムスリップしたようであった。年代ものの建築学教室本館がちょうどよい風合いを醸し出していた。

なお，このドラマは12月29日（火）午後9時からNHK総合で放送される予定である。

「黒崎警察署」となった建築学教室本館

（総務部）

お知らせ

無料法律相談のお知らせ
―12月実施分について申し込みを受付中―

法科大学院では，授業の一環として行う法律相談実務演習（リーガル・クリニック）において，無料法律相談を実施しております。

この無料法律相談は，日常生活の中で生じるさまざまな法律問題について，弁護士の立会いと指導のもと，既に法律知識を習得している法科大学院3年次の学生が市民の方々からのご相談に乗り，必要な助言を行うものです（秘密は厳守いたします）。

現在，12月実施分について申し込みを受付中です。

（実施日）12月2日（水），4日（金），7日（月），8日（火）

なお，1～3月は，無料法律相談はありません。

平成22年度は3月下旬から（相談実施は4月～）の受付となります。

※詳細は以下をご覧ください。

京都大学法科大学院ホームページ

http://lawschool.law.kyoto-u.ac.jp/kusunoki.html

問合せ先：京都大学法科大学院棟内　リーガル・クリニック担当

TEL：075－753－3262　FAX：075－753－3129（午前10時～午後5時／土日祝休）

（法科大学院）

「若者の薬物問題について考える講演会」を開催

京都市こころの健康増進センター・京都大学主催による「若者の薬物問題について考える講演会」を開催します。近時，若者を中心とした大麻等の薬物乱用事犯が後を絶ちません。なぜ若者たちの間で薬物使用が広がっているのか，どうすれば問題が解決の方向に向かうのか，当事者の方々によるお話等を通して薬物依存につい

て考える講演会です。講師は，薬物依存症専門のリハビリテーションセンターとして活動されている“ダルク”の方々です。是非，ご参加願います。

1．日　　時：12月９日(水)14：00～16：45(開場：13：30)
2．場　　所：京大会館　大講演室210号室　　京都市左京区吉田河原町15－9
3．内　　容：講演「トラウマと依存症－若者・著名人の薬物乱用事件を考える」
　　上岡　陽江(ダルク女性ハウス代表)
　　講演およびモデルミーティング「感情の裏側」
　　加藤　武士(京都ダルク施設長)
4．対　　象：京都市在住の方　200名
5．参 加 費：無料
6．申　　込：不要，先着順
7．問合せ先：京都大学学生部学生課　TEL：075－753－2505
　　※京都市こころの健康増進センター関連ページ
　　http://www.city.kyoto.jp/hokenfukushi/kokenzou/news/20091005-02.html

(学生部)

第６回時計台対話集会「木文化創出～森里海連環学がひらく未来社会」

1．日　　時：12月19日(土)13：00～17：00
2．場　　所：京都大学百周年時計台記念館
3．プログラム：13：00～　開会挨拶　白山　義久(フィールド科学教育研究センター長)
　　13：10～　来賓挨拶　江﨑　信芳(理事・副学長)
　　13：15～　基調講演Ⅰ　「森里海をつなぐ木文化社会」　あん・まくどなるど
　　(国連大学高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット所長)
　　14：00～　基調講演Ⅱ　「森の未来のために建築ができること」　平沼　孝啓(建築家)
　　15：00～　パネルディスカッション
　　コーディネーター　柴田　昌三(フィールド科学教育研究センター)
　　報告Ⅰ　「仁淀川流域における木文化プロジェクト」
　　長谷川尚史(フィールド科学教育研究センター)
　　報告Ⅱ　「由良川流域における木文化プロジェクト」
　　吉岡　崇仁(フィールド科学教育研究センター)
　　総合討論
　　パネリスト　あん・まくどなるど，平沼　孝啓，吉岡　崇仁，
　　長谷川 尚史
　　会場との対話(進行)　天野　礼子(アウトドアライター)
　　16：55～　閉会挨拶　山下　洋(フィールド科学教育研究センター)
　　17：00　閉会
4．参 加 費：無料
5．申 込 み：不要
6．定　　員：先着500名
7．問合せ先：京都大学フィールド科学教育研究センター企画情報室
　　〒606－8502　京都市左京区北白川追分町　TEL：075－753－6420　FAX：075－753－6451
　　本対話集会の詳細は，ホームページを参照してください。
　　http://fserc.kyoto-u.ac.jp/

(フィールド科学教育研究センター)

隔地施設紹介

屋久島観察ステーションの外観

豊かな照葉樹林の残る屋久島西部地域の山

野生動物研究センター屋久島観察所

（http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/stations/yaku_st/index.html）

屋久島

屋久島は，1993（平成５）年に世界遺産に登録されたことをきっかけに，ずいぶんとマスコミでも取り上げられるようになりました。屋久島という名前や，「世界自然遺産の島」といったフレーズは皆さんも目にされたことがあるでしょう。しかし，この島には20年以上前から京都大学の施設があり，全国から研究者が来て研究を続けていることは，ご存じないかもしれません。

屋久島は，鹿児島県大隅半島の南，約60km にある島です。面積は約500km^{2}で，だいたい直径25～30km の丸い島です。島の海岸部を取り囲む道路があり，一周すると約100km です。島の中央部には1800m を超える山々が連なっています。島の海岸部には約１万３千人の人が住んでいます。

この急峻な地形のおかげで，屋久島には人の影響の少ない森が多く残っています。植物の種数は1500種以上，固有種も40種を超えます。生物の研究者にはとても興味深い島です。哺乳類も亜種に分類される種が少なくありません。ニホンザルの亜種であるヤクシマザルやニホンジカの亜種であるヤクシカなど，本州の種とはすこし形態や行動が異なっており，面白い研究対象です。

屋久島は，原生自然の島であると同時に，古くから人が暮らしてきた島です。「手つかずの自然が残っている」と言われることもありますが，実際には，かなり人が利用してきています。人が利用してきたのに自然が良い状態で残っている，と言うべきかもしれません。最近では，人が自然をどのように利用し，自然と共存してきたかということにも，関心が集まっています。

グルーミング中のヤクシマザル

サルが落とす葉に群がるヤクシカ

屋久島観察所の状況

観察所といっても，その中に立派な観測装置があるわけではありません。観察所は，私たちが屋久島で調査をするときの拠点ですが，実際にデータを取っているのは，屋久島の自然の中です。屋久島での典型的な一日はこんな感じです。早朝に観察所を出発して，山の中に出かけていき，動物や植物を観察しサンプルを集めます。山の中の仕事を終えると，また観察所に帰ってきます。観察所では，サンプルの処理やデータ整理をしています。もちろん，食事をしたり，明日に備えて休んだりもします。

観察所ではサンプルの一次処理ができるよう，フリーザー，乾燥庫，流しなどの機材がそろえてあります。またKUINSの端末もあり，学内と同様にLANを使うことができます。とは言っても，回線は未だにISDNです。電子メールは大丈夫ですが，画像の多いホームページはちょっと苦しいです。現在，隣の集落までADSLが来ているので，早くここまで来ないかなと首を長くして待っているところです。

観察所を利用しているのは大学院生が多く，数週間から数ヶ月間滞在して調査をしている方もかなりいます。その間，同世代の大学院生や，他の研究者と生活を共にする訳ですが，これも貴重な経験です。対象種や研究テーマの異なる様々な研究者と知り合えるというのもフィールド調査の喜びです。

ステーション内でのミーティング（フィールド科学実習）

観察所の歴史

屋久島観察所の歴史は，野生ニホンザル研究の歴史と大きく重なります。1970年代半ばから，屋久島で野生ニホンザル研究が始まりました。1980年代に入って，屋久島でニホンザルを研究する大学院生も増え，調査のための生活基盤も徐々に整備されてきました。最初は，民家を貸してもらったり，あるいはキャンピングカーを庭先に置かせてもらってそこで生活したりしていたそうです。その後，有志で12畳ほどの小さな木造の小屋を建て，やっと自分たちの研究拠点ができました。このような諸先輩方の努力が，現在の観察所につながっています。

現在の観察所は，1988（昭和63）年に霊長類研究所の施設として建設されました。2008（平成20）年に野生

観察所前の浜に産卵に来たウミガメ

足下にひょっこり現れたコイタチ

動物研究センターに移管され，現在に至っています。この間，大学院生を中心に，数多くの研究者が利用してきました。初期にはニホンザルの研究者が多かったのですが，現在では，対象種も多様になってきました。研究手法も多様になり，最近は，動物や植物を山で観察するだけでなく，サンプルを収集して分析したり，実験をしたりする人も増えてきました。

教育へのかかわり

研究者の個別の教育活動は，屋久島で調査が始まった当初からいろいろと行われてきています。京都大学としての取り組みは，2003（平成15）年からの屋久島フィールドワーク講座が挙げられます。京都大学21世紀 COE「生物多様性の統合のための拠点形成」と上屋久町（現在の屋久島町）との共催でこの講座を行いました。全国から大学生約20名を募り，５つのコースに分かれ，それぞれ異なるテーマでフィールドワークを経験しました。この講座は，単なる自然観察会ではなく，参加者自身が自分の目で見，手足を動かして調査をすることで，フィールドワークの基礎を学ぶことを目的としています。そのため，コースによってはかなりハードな調査も行いました。それでも参加者や講師の意欲が非常に高く，最終日にはレベルの高い研究発表がされ，熱心な質疑応答が行われてきました。

鳥の観察（フィールド科学実習）

2008（平成20）年からはこの講座を継承する形で，京都大学グローバル COE プログラム「生物の多様性と進化研究のための拠点形成－ゲノムから生態系まで」による屋久島フィールド科学実習が行われています。こちらも非常に人気があり，大学院生が熱心にフィールドワークに取り組んでいます。

このような教育活動が可能であるのは，なんと言っても屋久島の自然がすばらしいことにあります。そして，この自然のすばらしさに惹かれて，多くの研究者が集い，熱意のあふれる学生がやってくることで成り立っています。これからもこの屋久島の良さを生かして，研究や教育のお手伝いができればと思っています。

所在地

〒891－4201　鹿児島県熊毛郡屋久島町永田浜の上

施設利用に関しては，野生動物研究センターのホームページをご覧ください。

http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/cooperative.html（共同利用のページ）

アクセス
- 鹿児島空港ー屋久島空港（35分），屋久島空港から約30km（自動車で45分，バスで56分）
- 鹿児島港ー宮乃浦港（高速船で１時間50分，フェリーで３時間55分），宮乃浦港から約20km（自動車で30分，バスで35分）

ご意見・ご感想をお寄せください。
京都大学総務部広報課　〒606-8501　京都市左京区吉田本町　E-mail：kohho52@mail.adm.kyoto-u.ac.jp